◉有史以前の近江

（滋賀縣史蹟調査報告第一册）

島田　貞彦著

近江の國は、その大湖を以て古來有名であり、特殊な人文的關係がこゝに想到せられ、興味がある。

本書はこの近江の先史時代を取扱ひ、許す限りの遺物遺跡の調査をなし、記述亦詳密、記する所は所謂石器時代のみに止らず、近江出土の銅鐸に就いても一章を成し附するに銅鐸概說を以てし、最後に「琵琶湖を中心として見たる四圍」と題して近江一國を概觀し、また「史前の近畿」なる章を設けて、近畿地方の先史時代にも論及してゐる。これによつて近江の史前を知り、併せて近畿の史前を知り、日本の史前をも窺ふに足るものがある。史前の近江を取扱ふにあたり近畿のみならず、全國に亙つて考察して、本邦石器時代に於ける近江の位置を明らかにせんとしたのは、一縣の報告としては異論があるかも知れぬが、本書の數多い特色に數へることが出來るであらう。

併し、近江國の地形的特色は、特に地形概說を設けて說き、更に遺跡の標高と湖の汀線との關係より先史聚落の問題にも觸れんとしたにも拘らず、先史時代の湖畔生活を特色づくべき何物も現れなかつたのは何故であらうか。由來、本邦の自然は規模小さく、大湖と雖も兩岸は以て相眺むべく、人文上から云へば池と異るところがない。その上何事につけても資料が少い上代のことであから、强ひて特色づけない點は却つて眞摯なる態度と云はなくてはなるまい。

兎に角、本書によつて史前の近江は明らかになつた。また歷史時代の湖畔地方の生活が、遺物遺跡に立脚する考古學よりも習慣、傳說に依據する民俗學より解剖され、人類の生活と湖の交涉を語る代表的な一例として提示さるゝ日を期待する次第である。〔水野〕